

れているのはなぜであろうか。たしかに、シューベルトはドイツ人であるヒツシュやフィッシャーディースカウ、あるいはシュヴァルツコップ、シュトライヒによって歌われている。代表作「冬の旅」や「美しき水車小屋の乙女」はドイツ人、ミュラー（Wilhelm Müller）の詩によっているし、シューベルトは「野ばら」など、ゲーテの詩を歌にしている。私は、モーツァルト、シュトラウスなどウィーン（オーストリア）音楽と、バッハ、メンデルスゾーンなどのドイツの音楽は性格を異にしていると思うが、ベートーヴェンやブラームスはじめ多くのドイツの作曲家がウィーンで活躍したので、両者の融和から美しいリートが生まれたのかも知れない。何と言ってもウィーンは音楽の都である。

シューベルトの歌曲といえば松高時代の親しかった友、吉田極君を思い出さずにはいられない。先年亡くなったが、その数年前、根矢学君と東京に行ったとき、築地の寿司店で吉田君と会ったのが最後であった。松高時代、私と同じ旅順からの転入生であった吉田君（文乙）と私は音楽部で親しくしており、ともに音楽を楽しんだ。歌、ヴィオラ、指揮、と彼の音楽的才能は抜群で、松高音楽部は吉田極なくしては成り立たなかった。彼の歌うシューベルトの「魔王（Erlkönig）」は絶品で、深みのある、美しい声の響きは今も私の耳に残っている。これも故人となった釣流英明君（文乙）（彼や根矢君と私は三光寮三津浜分寮で一緒であった）が作詞、吉田極君が作曲した松山高等学校七十五周年記念歌「瀬戸の海は」は記念式典で披露され、紺田幹事がテープにいれて頒布したから、多くの同窓生の皆さんはご存じであろう。この曲にも吉田極君の音楽的才能が表われており、この記念歌には寮歌とも異なる、ドイツリートのそしてウィーン的情緒が垣間見られるように私には感じられる。

ヒツシュと比べるのは酷というものであるが、声量のある萬田君がドイツ語と音楽に精進を重ね、詩と音楽の心を理解し、せめて吉田極君の域に早く達するよう期待したい。日本では音楽関係の大学に入学する男子が少ないと聞くから、彼には是非頑張ってもらいたいものである。そして、また何時の日にか松高同窓会京阪神支部総会で出席者の魂を揺さぶるような音楽を聴かしてくれることを願うことにしよう。（松山高等学校同窓会京阪神支部会報、平成10年度）

3. 科学一般、外国語

「若い頭脳“流出”を防ごうー本人も幸せにならない」

1. 10年前と同じ顔触れ

いよいよ秋の学会シーズンだが、来月開かれる日本植物学会のプログラムを見て、一つのこと気がついた。私の専攻する植物ホルモンに関係した生理、生化学の分野では、10年前のプログラムとほとんど同じ顔触れが並んでいるのだ。入替わっているのは、共同研究者の若い人たちだけである。ところで、4年ごとに開かれる国際植物ホルモン会議の第6回会議が、さきごろカナダのオタワで開催され、私も招かれて出席した。そのプログラムを、前回あるいは前々回のそれと比べてみると、次の2つの事実に気がつく。1つは、ヨーロッパの学者の参加が減っ

てアメリカ勢がふえたこと。もう1つは、そのアメリカ勢のうち数人の歴史的長老学者を除くと、多数の新人研究者が進出していることである。

この現象は、おそらく植物ホルモンの分野に限るまい。わが国に独創姓のある活発な研究が乏しいのは、若い研究者の層が薄いためだが、このプログラムの示す傾向がもしつづくなら、わが国の学界が将来どうなるかは、だれの目にも明かだろう。そして、この問題は、近ごろ再び論議されだした“頭脳の海外流出”とも密接に結び付いているのである。よく知られるように、わが国の大学は、研究者の流動性が極端に小さい。学閥、講座制にもとづいた“縦割り小部屋体制”のおかげで、無能な教官でもいったん採用されると定年まで身分を保証され、新人採用の道をふさぐ。そのうえ、戦後誕生した新制大学の多くの教室は特定の旧帝大の系列に入っているため、新しい大学での教官新規採用は一般に旧帝大卒業生を対象にしている。最近、この傾向はいくぶん弱まりつつあるが、それでも新しい大学の卒業生が助手になる道は非常にせまい。まして、彼等が旧帝大の助手に採用される例は皆無に近いといっている。

“縦割り小部屋体制”の被害は、助手クラスの若い研究者にとっても深刻だ。彼等がいくら業績をあげて国際的に認められても、上位の席があかない限り昇任はできないし、自主的な研究の自由すら持てないのが普通である。

では、アメリカはどうだろう。博士号をとると、直ちに出身校以外の大学、研究所で1、2年、研究員として十分な給料をもらって研究する。その後、助教授（わが国の学位をもった助手に相当する）に任命されるが、多くの場合は広く公募されたものに応募して採用されるのだ。学閥は事実上なく、講座制もないから、助教授になれば自分の研究グループを作ることができる。アメリカには教授、助教授、講師、助手という1講座内における縦の職階はない。職階は教員としての経験などによって決まるもので、研究者としてはすべて対等だし、昇任は上位者の定数に左右されない。

さて、その研究グループは、リーダーである教授または助教授のほか、研究員および大学院学生からなっている。ところが、これら若手のメンバーは、先に述べたとおり数年ごとに他の大学へ移ってしまう。したがって、リーダーはいつも新人獲得を心がけねばならず、そのためには自分の研究を常に魅力あるものにしなければならない。研究費も、わが国の1講座いくらかちがって、ほとんどが科学研究費のように政府機関などへの申請によって決まる。だから研究費獲得のためにも自らの研究内容を高めねばならない。そのかわり優秀な人は、年齢にかかわらず、高給でよい大学に迎えらる。

2. 若手研究者の不遇

わが国にとって大きな損失である“頭脳の流出”は、つまり、日本における若い研究者の不遇とアメリカの人材要求が、一種の需要・供給のバランスを形づくっていることから起るのである。日本の現状にあきたりない若い人が業績を認められて招かれることも多いし、研究者としての就職口がないため渡米する例も少なくない。

だが、問題は“輸出”された日本人研究者が、アメリカ人と全く対等に研究する自由が保証されているとは限らないことである。多くの場合は研究員としてあちこちの大学を移動するばかりで、なかなか教授職にありつけない。運よく助教授、教授になれた少数の人でも、人種偏

見のためか、優秀な研究員や大学院学生を獲得できないという。対米用“頭脳輸出”は、国家的損失だけでなく、その人個人にとっても幸せでない場合が大部分なのである。

つい先日、アメリカの某教授が私たちの研究室をおとずれた。いろいろ研究上の討論をしたあと、彼は私に一人の大学院学生についてくわしい質問をはじめた。その学生を彼の研究グループにスカウトしたいというのである。私はもちろん本人の意思を聞かなければとして確答を避けた。なぜなら、私はこの優秀な学生をアメリカに“身売り”させたくなかったし、私たちの研究グループの一員として今後も日本の学界のために活躍してもらいたかったからである。だが、彼が学位を取得したあと、国内で彼にふさわしい研究職の地位が得られなかったときには、どうすればよいのだろう。

3. 人事の流動性を望む

わが国における研究活性の低下の原因となっている若手研究者の層の薄まりを防ぐためには、アメリカ方式のいくつかを早急にとり入れねばならないと思う。とりあえず当局に検討してもらいたいのは、人事の流動性を高めることである。教授以下、教官の人事流動こそ最も望ましいが、その前に大学院学生の流動化を希望したい。すなわち、学部から大学院、および修士から博士過程に進学する場合は、原則として他の大学に移ること、また助手を採用するときは他大学出身者を採用すること、の二つである。

わが国学界の発展は若手研究者の肩にかかっている。彼等の才能を伸ばし、わが国の研究を高めるために私たちはいま真剣に若手研究者の“身売り”を阻止する対策を考えなくてはならないと思う。(朝日新聞、1967年9月23日「文化欄」)

「科学研究“横取り”から自衛を一国際評価の高い学術雑誌、日本自ら育てる必要」

科学の国際社会で、他人の研究業績の“横取り”が行われており、日本人科学者が被害者になることがふえている、という記事が、朝日新聞2月5日付夕刊（朝刊のみの地域は6日付）に出ていた。

1. 古くから各分野で

自然科学の分野における研究者間の競争や研究の優先権争いは古くからあり、私が専門とする植物生理学の研究も例外ではない。18世紀の終りごろ、イギリス人プリーストリとオランダ人インゲンハウスは、異なった植物と実験方法を用いて独立に、植物が光の作用で光合成を行った結果、酸素を放出することを見出した。ところがインゲンハウスがこの事実を先に本にまとめて出版したので、プリーストリは、以前にインゲンハウスが彼を訪ねたとき、その考えを盗んだと思い込み、インゲンハウスを“横取り人”と宣伝した。

他の分野では、微分法の発見に関するニュートンとライプニッツの先取権争いや、ダーウィンの進化論学説が発表前に他人のものになりそうになった話などが有名だ。研究における優先権争いはむしろ、自然科学という学問の世界では避けられない問題とおもわれる。

現在、一般的な研究発表の手段は次のようになっている。論文をその分野の専門研究誌に投稿する。するとその分野の専門家である複数の審査員が投稿論文を審査し、可とされた論文だけが掲載される。したがって、審査員が競争者である場合もあって、審査の過程で“横取り”